
Magic of emblem

Z 1 0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c o f e m b l e m

【Nコード】

N 2 5 9 0 N

【作者名】

Z 1 0

【あらすじ】

精霊の声を聞いたものは世界大戦を引き起こす。普通の高校生の進藤達也は、魔法に出会い精霊の声を聞く。

出会い

昔から我が家には父親はいなかった。

小学校高学年に母に父の事を聞くと「妊娠が発覚するとあの人は蒸発した・・・」と聞かされた。

片親なのに不自由しなかったのは、ある程度の貯蓄があるからと母は笑顔で答えた。

家から2 駅程の高校に進学したのは今年の春のこと・・・

そのころから俺は不思議な体験をすることとなる。

7月に入り暑さがジワジワとする。汗でべたつくシャツ緩め駅のホームに急ぐ。

これに乗り遅れたら10分間も暑い中待たなくてはならない・・・それだけは避けたい。

改札を抜けた時、一人の少女にぶつかりそうになる。

「すいません！」慌てて謝罪しその場を横切る。

「ちよつと待つて！」腕を掴み引き止める。

「・・・なんですか？急いでるんですけど・・・」困惑し立ち止まる。

「少し時間作れる？アンタに興味あるんだけど・・・」少女は笑顔で答える。

俺は突然の出来事に混乱した。

これは俗に言う逆ナンってやつか！！いや・・・美人局か！！

相手の少女があまりにもタイプだったため、「うん！いいよ！」二つ返事で答えた。

駅から少し離れた公園に入る。

なんだ？喫茶店かファーストフードの店に入ると思っていたが・・・まさか公園とは・・・

「ここなら大丈夫ね！！」そこは人気ひとけのない静かな場所だった。

なにをするんだ・・まさか！！あつちか？期待してもいいのか！！
「ちよつと、手のひらを見せて？」俺の手のひらを指でなぞる。
女性に触れられるなんて・・中学のホークダンス以来だ。

感激のあまり半泣きになっていると少女は一步後ろに下がり笑顔を見せた。

「えゝつと、私は魔術師です。あなたにはその才能があるの・・出会った時に感じたの。だから・・私の弟子にならない？」

なにを言うかと思えば・・あれか？電波つてやつか・・可愛いのに勿体無い・・

「いや・・結構です・・」その場を離れようとしたが足が動かない。なんだ？久々に触れてもらったあまりに感動して足が動かないのか？

「アンタの手に魔方阵を書いたから、当分動けないよ。」俺の反応を見て少しニヤつく。

可愛い顔してなに言つてんだ？

「それと私の名前は石田葉月、明星高校の3年よ。よろしく！」
どおりで見かけない制服だと思った。3年つうー事は年上か・・

「俺の名前は進藤達也、森高の1年です。」

「1年かあ・・どおりでまだ顔が幼いと思った！」

・・・可愛くなかったら殴つてたな・・

「さて！今日はもう遅いし、魔術の使い方と1つだけ魔法教えてあげる。」そう言う彼女俺の金縛りを解いた。

誰もいない公園でただひたすら右手で左の手のひらに紋章を書いている。

いつまで続くこの地獄・・彼女が言うには利き手がペンで逆手がノートらしい。

右の人差し指に小さな印を刻み左手に書くだけで左の手のひらに魔法が発動する・・らしい。

「・・・ふう、何時までやればいいんですか？」

「なによ！もうあきたの？しょうがないなあゝ印を刻んで魔法使っ

てみる？」

印を刻む作業はかなり痛いかと思ったがボールペンみたいなやつで何か書いただけだった。

「よし！さあ魔法発動して見せて。」

言われるがまま魔法を発動して見せた。

左手に透明な物が浮かんでいる、何だこれ？水か？

「まあ初心者だから安全な水の魔法の紋章を教えたんだけど・・・まさか一発で発動するとは・・・」

彼女も少し驚いた表情を見せた。

「どうするんですかこれ！？」

「その辺にポイしとけば？普通の水だし問題ないよ。」

「・・・」 ポイ 水が地面に弾ける。

家に帰りいつも通りの時間が過ぎ、ベットに寝転がる。

いろいろあったがなんといっても今日一番驚いたのは、携帯のアドレス帳に女の子の名前が載った事かぁ！！えっへへへ・・・さて寝るか・・・

珍しく朝早くから目が覚めた。まだ5時か・・・体を起き上がらせベットに座る。

やっぱり夢か。頭をかきむしる。誰だったんだ？変なことばかり言っていたなあー

放課後 葉月さんに夢の話をした。

「紋章を教えてくれた？」

「そうなんですよ・・・訳が分かりません」

「その紋章は発動した？」

「・・・しました。」

葉月さんは携帯を取り出し誰かに電話している

「師匠ですか？葉月です。実は大変な事に・・・」

誰に電話してんだ？小声で聞き取りづらいなあ。

「今日は家に帰りなさい！連絡があるまで自宅で待機してて。学校も行ってはだめよ！」

「いつ！マジですか！」

トボトボと自宅に帰り。翌朝には仮病を装い学校を休んだ。

だが、その日の夜に「いつもの公園で待つ」とメールが届いた。

アメリカ シカゴ

ポケットの中の携帯が鳴る。金髪の男性は慌てて電話にでる。

「はい、用件は？」

「仕事だよジャック、日本に飛んでもらいたい・・・」

「いまから会社なんですが、日本ですか・・・10時間は掛かりますね。今すぐですよね？」

「そうだ不測の事態と言うやつだ。至急、飛んでくれ。」

「了解」

スーツ姿の男性は両手でヒザを触ると瞬く間に浮かび空の彼方に消えた。

公園

夜の公園は人気もなく静まりかえっていた。

遅いな葉月さん、なにやってんだ？

「こんばんは。」

見知らぬ外人が近づいてくる。

「はあ・・・こんばんは」

俺はベンチから立ちその場を離れようとする。

「君が・・・進藤達也くんかな？東洋人は似た顔が多くてよくわからないだよ。」

「いえ、僕は植田圭介です。」

平気な顔してクラスメイトの名前を言う。

「そうかぁ・・・人違いだスマナイ」

「それでは・・・さよなら！」早速でその場を去ろうとする。
ジャックは携帯の写真で目標の確認をする。

「やっぱり、アイツかぁ・・・」

外人の変態か？救えないな・・・葉月さん来ないし帰るか。

ボワアアアア！

周りを炎が囲む「なんだぁ！」

「シ・ン・ド・ウ・ク・ン、久しぶり。」

さっきの変態か？魔術師だったのか？

「魔術師には知り合いは少ないんですけど・・・」

「残念ながら、魔術師ではない・・・紋章師ってやつだ。」

紋章師？初めて聞いた・・・

「なにが違うの？」

「・・・知らないのか？魔術は紋章を手で書いて発動するだろ？紋章師は体に刻んである紋章に触れて発動させるんだ。故に発動が早い」

「アンタの方が有利と言いたいんだな？それで俺に何の用？」

「50年ぶりに精霊の声を聞いた奴が現れたと聞いてな・・・術式を教えてもらいに来た！」

精霊？こないだの夢のやつか？あれが精霊？

「教えてくれないのなら・・・消すしかないんだが。嫌だろ若くして死ぬのは？」

葉月さんが家から出るなって言っただのはこう言うことか。

右手で素早く発動させる。左手の水を炎に投げ入れる。

ジュウ 一瞬で蒸発する。

「バカにしているのかな？」

・・・ならとっておきだ！魔術を発動させる。左手に炎が宿るその周りに風が舞う。

「ほぉ・・・それが精霊の術式か？」

ジャックは両手を合わせ半回転させる。手を離し構え時に両手から

火の玉がでる。

フン！火の玉が襲い掛かる！よく見たら外人の背中には無数の火の玉が浮かんでいる。

なにくそ！左手を前にだし風でそらす。

「諦める！実力が違うぞ！」外人は左手を胸にあて。大きく振る、その瞬間巨大な火柱が地面から突きで空中に上がりコツチに突っ込んでくる。

「・・・カンベン」

大きな爆発が起こる。

「・・・ん？気がつけば木に吊るされていた。」

「さっきの公園は今は騒がしいからな。」外人はタバコを吹かし喋りかけてくる。

「誰のせいで！」

「もちろんキミだろ？なあ師匠さん？」

振り向くと葉月さんが立っていた。

「あれほど家で待機って言ってたのに・・・」

「すいません。」

「まあそう言っな！私としては上手くいったがな」

吸殻を捨てると地面に当たる前に燃えカスとなった。

「さて・・・じゃあ私はそろそろ帰らせてもらっよ。」

「術式聞かなくていいの？」

「あれはデマって事でいい・・・あまり危険な術でもないしな・・・」

ジャックは両手でヒザを触ると瞬間に飛んでいった。

「殺す！とか言ってたのに。えらく呆気ないですね？」

「昔、精霊の術式を使って魔法大戦を起こしたヤツがいてね・・・次に精霊の声を聞いた人ができれば問答無用で軟禁するって言う条約ができたのよ」

「迷惑な話ですね・・・」

「まあ、それほど強力な魔法なのよ。さて！帰りますか。」

帰り道にふと立ち止まる。妙な空気が漂う、自分も魔法大戦を招くのか？まさか・・・頭をかきながら歩きだす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2590n/>

Magic of emblem

2010年10月9日17時51分発行